



TITLE:

物理学教室図書室における図書貸出・返却新システムの稼働

AUTHOR(S):

西尾, 淑子

CITATION:

西尾, 淑子. 物理学教室図書室における図書貸出・返却新システムの稼働. 静脩 1999, 35(3): 10-10

ISSUE DATE:

1999-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37514>

RIGHT:

物理学教室図書室における図書貸出・返却新システムの稼働

理学部物理学教室図書室 西 尾 淑 子

理学部物理学教室で図書貸出・返却新システムの稼働を開始して、ほぼ半年が経過しました。この新システム導入が、図書室の利用者と職員にもたらした変化を報告します。

従来物理学教室図書室では図書の貸出は、利用者の手書きによるセルフサービスになっていました。利用者は書架から図書を取りだし、カウンターにある2枚複写の借用簿に必要事項を記入。職員は借用簿の1枚を代本板に利用し、返却時には利用者が自分で図書を書架に戻して、借用簿に返却日付を記入するという方式でした。

図書貸出冊数、貸出期間について利用規程はありますが、規程はほとんど守られておらず、借用簿はカウンターにたまる一方でした。返却請求は、学生アルバイトと職員が定期的に行うとともに、年1回程度図書委員会を通じて、研究室に返却請求をするなどいろいろ工夫をしていましたが、手書きの借用簿は判読し辛く、返却請求は経費と時間のかかるストレスのたまる仕事でした。

利用者には、借用簿への記入と、返却時に多くの借用簿の中から該当のものを探し出すという面倒をかけていましたし、新たな利用者には、欲しい資料がその場で見られないなど多くの不便をかけていました。

数年前から物理学教室図書委員会で図書業務の機械化が問題になり、図書の借用・返却方式についても「…利用者に非常に不便である…」と厳しく指摘されていました。機械化の必要性は十分理解していてもどのようにすればいいのか皆目見当がつかず、附属図書館の次期システム時になんとか一緒に導入できたらと思っていました。

貸出システムの前提になる図書の遡及入力については、附属図書館の京都大学特殊コレクション文献データベース作成事業に参加すると

ともに、教室からも経費をいただき平成9年8月から12月の4ヶ月で終えることができました。そして、平成10年4月からの附属図書館の新貸出システム運用開始に続き、6月から物理学教室図書室もシステムによる貸出業務を開始しました。

物理学教室図書室での貸出システム導入にあたっては、個人のプライバシーが守れること、さらに、当教室の大学院生以上の構成員については、従来通りセルフサービスでの24時間利用が可能なこと、この2条件を考慮しました。

新システムでは、利用規程の貸出冊数、貸出期間がコンピュータに設定されているので、貸出条件をオーバーした場合、そのことを機械が利用者に知らせ、貸出を停止します。返却請求業務に関しても、瞬時のうちに必要な督促帳票などが出力されます。これで、業務の簡素化はもちろんのこと、常に一定の図書が書架に並び、利用したい人が利用したいときに利用できるという環境が整いました。また、遡及入力によって、何十年も人目に触れず利用されなかった図書に、学外からも利用希望が来るようになりました。

機械化のために費やした4ヶ月とその前後の日々は、嵐の中にいるような大混乱の日々でしたが、この混乱の極みの日々は、附属図書館、理学部、物理学教室、そしてその他の多くの方々に支えていただいて、無事乗り切ることができました。

このような経験ができたことに、心から感謝しています。一日の業務を終えて図書室を退出するとき、真っ暗になった閲覧室を振り返ると、カウンターの上のパソコンの画面に「単行本貸出・返却用端末です。」という赤いテロップが滑るように静かに流れています。

(にしお としこ)